

福島県南相馬市川原田地区天照皇太神宮社殿奉納

熊本県立球磨工業高等学校

平成24年2月の山田神社仮社殿奉納（福島県相馬市八沢浦干拓）に続く東日本大震災復興支援の第二弾として、津波で社殿が流失した南相馬市川原田地区の天照皇太神宮へ祠を届けてきました。今回の祠は熊本市横手にお祀りしてあった「民生委員の父・林市蔵氏」縁のものを本校で譲り受けて保管していたもので、明治初期の造りと思われる優美な祠です。それを平成23年度の課題研究で高校生8人が全解体した上で修復しました。その時に担当していた生徒が伝統建築専攻科2年に在籍していたので、生徒2人と職員2人が学校から参加しました。今回は他にも建屋が一基（相馬市の小高神社に奉納）と人吉・球磨の野菜や熊本県産の果物などを支援物資として持参しました。



同行したのは橋渡し役の志岐八幡（苓北町）の宮崎國忠宮司や青井阿蘇神社の福川義文宮司をはじめとする熊本県の若手神職の皆様。片道二日のバスの旅ですが、参加者は疲れも見せず和気藹々とした雰囲気になっていました。しかし、南相馬市に入ると、立ち入り規制は解除されたものの住民は避難したままで、生活されている方の人影は疎らでした。一方、除染作業にあたる作業員の姿ばかりが目につき、復興の進捗具合を実感しました。

8月22日に小高神社を經由して天照皇太神宮へ祠を設置して遷座式を迎えました。仮社殿という触れ込みでしたが、天照皇太神宮の相馬胤道宮司から「本殿としてお祀りしたい。」との言葉をいただき感激しました。午後からは、北海道・新潟・熊本の神職有志と地元福島の若手神職の皆さんが男山八幡神社の境内で企画された「復興支援活動縁日」に参加しました。被災者の仮設住宅が近くにあり、小雨の中、数百人の参加がありました。子ども達と、その昔子どもだった方々の笑顔が溢れていました。



翌日は、山田神社へ参拝し「この祠をお祀りできたことで、地域みんながひとつの同じ方向を向いて、前に踏み出すことができました。来年は農業を再開しようと考えています。」と感謝の言葉をいただきました。ものづくりに携わる者の冥利に尽きるお言葉です。

今回は雪に覆われて被災地の悲惨な様子はあまり浮かんできませんでした。今回は瓦礫の撤去こそ進んだものの、住民の生活はほとんど回復していないことを改めて感じた次第です。特に、子育て世代の方が「子ども達に故郷を残してあげたいが、いつも不安に押し潰されそうになる。でも頑張っていくしかない。」と涙ながらに訴えられた事が印象深く残っています。これからも私たちにできることを形にしていきたいと思えます。

前回には雪に覆われて被災地の悲惨な様子はあまり浮かんできませんでした。今回は瓦礫の撤去こそ進んだものの、住民の生活はほとんど回復していないことを改めて感じた次第です。特に、子育て世代の方が「子ども達に故郷を残してあげたいが、いつも不安に押し潰されそうになる。でも頑張っていくしかない。」と涙ながらに訴えられた事が印象深く残っています。これからも私たちにできることを形にしていきたいと思えます。